

# ポスター発表 概要一覧

主 題 及 び 副 題	内 容	発表者名	所 属	連 名 者
<b>発達段階を踏まえた授業実践</b> ～デジタル・アナログ両輪の教材研究及び評価方法の検討～	本チームでは、「発達段階を踏まえた授業実践」の研究の中で、児童生徒の実態に合わせてふさわしい教材の検討を行ってきた。大きくデジタル教材、アナログ教材に分かれるが、そのどちらが子どもたちにとってふさわしいかを検討した。また、「集中度」や「楽しさ」といった授業態度の評価は。これまで教師の主観によることが多かった。このことについて、ICT の技術（表情等非言語コミュニケーションの定量分析）を用いた態度評価を行なった。これらの成果について報告する。	佐伯 由衣 下藤 真也	大阪教育大学 附属特別支援学校	本校教員 ・松本 将孝 ・大淵 周平 ・竹内 ゆりか ・松井 都和
<b>課題関連図を活用した            中学部自立活動の指導実践</b> ー給食指導場面の食事に注目してー	本校研究主題から導き出された方向性の 1 グループ「A 指導実践の成果」について、本校中学部の自立活動の指導・支援の場面として給食指導の食事に注目し、課題の根拠を導くためのツールとして「課題関連図」を用いた指導実践を展開することからの教育的効果や課題を明らかにする。	未 定	大阪教育大学 附属特別支援学校	・笠岡 一行 ・名加 一成 ・酒井 理恵
<b>「現象分析」と「因果推論」による実            態把握及び指導仮説の比較検討</b>	自立活動研究グループ、理論グループの研究です。	岩井 俊夫	大阪教育大学 附属特別支援学校	・丹沢 正太 ・酒井 理恵
<b>知的障害特別支援学校におけ            る主体的・対話的で深い学びの            視点に基づいた教科学習の検証</b> ～事例研究～	「主体的・対話的で深い学び」とは、知識や技能の一方的な注入や教え込みではなく、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視し、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習である。本研究では「主体的・対話的で深い学び」の視点に基づいた授業実践を行い、児童生徒の主体性や協働意識が高まるよう工夫することで、教科目標の定着や、日常生活場面での変容を検証する。	岡本 聡	大阪教育大学 附属特別支援学校	・渡部 敬真 ・下岡 花子 ・岸本 早生里 ・辻 奈誠子 ・宮城 範子
<b>インクルーシブ教育推進のための            交流及び共同学習について</b>	インクルーシブ教育システムの構築を目的とし、3つの時期に分け大阪教育大学附属中学校と年間 10 回程度の交流を行った。今年度は大阪府立障がい者交流促進センター（ファインプラザ大阪）、大阪市立長居障がい者スポーツセンター、セレッソ大阪、パラリンピック選手と連携をとることで、地域とのつながりを深め、障がい者スポーツにおいてより専門性の高い指導を目指した。	大原 健哲	大阪教育大学 附属特別支援学校	・中島 弘貴 ・堤 文希 ・縄 真美子 ・千阪 彩音
<b>実習生へのアンケート調査からの            ー考察</b> ～実習生の育成チーム （2年次の取り組み）～	実習生は、実習を通してどのような力をつけることができたのかを明らかにするため、H29 年度に特別支援学校で実習を行った特別支援教育教員養成課程 3 回生と特別支援教育特別専攻科の実習生を対象として教育実習に関するアンケート調査を実施した。その調査結果の分析、考察した。	北室 聖史	大阪教育大学 附属特別支援学校	・岩崎 弘 ・上床 亜利沙 ・広川 智千 ・吉村 晋治
<b>附属特別支援学校における、            学生研究ボランティアとの連携実践</b>	本校児童を対象とした、学生による実践研究	大淵 周平	大阪教育大学 附属特別支援学校  大阪教育大学 大学院	小学部教員 ・大淵 周平 ・丹沢 正太 ・渡部 敬真 ・佐伯 由衣  本学学生 ・小林 千紗 ・大西 潤 ・今田 睦 ・壽 乃雅 ・藤田 遥子

<p><b>特別支援学校小学部国語（知的障害）におけるFDコンテンツの開発～HATOプロジェクト 教育実習の指導教員のためのFDコンテンツ～</b></p>	<p>HATO プロジェクト:大規模教員養成系単科大学の北海道教育大学（H）、愛知教育大学（A）、東京学芸大学（T）、大阪教育大学（O）の4大学を中心に、教員養成教育が共通して抱える諸問題を共同で解決できる体制の整備と、全国のネットワーク化によって、日本における教員養成の高度化支援システムを構築するプロジェクトである。</p>	<p>松本 将孝</p>	<p>大阪教育大学 附属特別支援学校</p> <p>大阪教育大学 科学教育センター</p>	<p>・大島真佐子</p> <p>・仲矢 史雄</p>
<p><b>支援学校と協働した高等学校における自立活動の取り組みーコグトレやビジョントレーニングによる認知機能へのアプローチー</b></p>	<p>ノートテイクの困難さ等により学業不振状態にある生徒に対し、コグトレやビジョントレーニングによる認知機能向上に向けた指導の実践事例。放課後に実施する自立活動の指導として位置づけ、直接指導と家庭学習の併用で実施した取り組みの経過・成果・課題を報告する。</p>	<p>長澤 洋信</p>	<p>大阪府立 和泉支援学校 首席</p>	<p>・麻生川 理詠</p>
<p><b>地域連携の一環としての読み書き障害児への指導教室である「つくしんぼ教室」での指導</b></p>	<p>平成29年5月から現在に至るまで、主に大阪教育大学附属特別支援学校近隣の小中学校および本学附属校園に在籍する学習障がいのある児童生徒を対象に、学習障がいのアセスメントと、読み書き・語彙指導を行ってきた。平成29年度は通算28件、平成30年度は41件（平成30年12月末時点）の相談（継続的な指導を含む）があった。本発表では、これらの相談ケースのうち、現在も継続的な来室がある児童生徒4事例へのアセスメント結果に基づく指導経過について報告する。</p>	<p>三盃 亜美</p>	<p>大阪教育大学 教育学部 特別支援教育講座 講師</p>	
<p><b>プログラミング教育で育つ考える力 ：特別支援教育での展開</b></p>	<p>プログラミング教育は、2020年から新学習指導要領で必修化されることになりました。その目的は、プログラミングの学習を通じて、子どもたちの論理的思考力を育てることです。</p> <p>そして、筋道を立てて考え、目的を達成する、うまく行かなかったら改善するという、プログラミング教育ならではの、手法は、体験を通じて学ぶという特別支援教育に非常に合致するものです。</p> <p>これまで、プログラミングといえば、パソコンの前でキーボードをたたいて、難解なコードを入力していかなければならないという認識がほとんどでした。近年、プログラミング教育は多様な方法が発展し、あたかもブロックを積み重ねていく方法でプログラミングしていく、ブロックコンピューティングという手法や、さらにパソコンなしでプログラミングの思考方法を学ぶ手法も開発されています。これらの新しい手法をつかって、文字に苦手感のある児童も思考力や問題解決力を育成する方法を紹介します。</p>	<p>仲矢 史雄</p>	<p>大阪教育大学 科学教育センター 准教授</p>	